

**どこでもいつまでもイキイキと生活するために**  
**～対象者主体と多職種連携のツールとしての生活行為向上マネジメント～**

石岡市医師会 介護老人保健施設 ゆうゆう リハビリテーション科科长 **渡邊 基子**

**【略歴】**

神戸大学医学部保健学科作業療法学専攻を終了後、神戸リハビリテーション病院に勤務。その後、介護老人保健施設ゆうゆうに入職。老健入所・通所リハビリ・訪問リハビリに従事しながら、リハ科長として管理業務にも携わっている。この間、茨城県立医療大学保健医療研究科修士課程を修了し、現在は博士課程に在籍している。昨年度より、日本作業療法士協会が実施する老人保健健康推進等事業において入所班の班長を務める。また、茨城県作業療法士会理事、茨城県リハビリテーションケア学会理事を務めている。

**【要旨】**

私達の生活は、日常の生活行為（以下作業）の連続から成り立っており、その作業は個々人にとって「意味のある・大切な作業」と言える。日本作業療法士協会（以下協会）のスローガンは「作業をすることで人は健康（元気）になれる」である。その人にとって意味のある作業を続け、その結果から満足感や充足感を得て、健康であると実感できると考える。つまり、障害があっても、癌の末期となっても、要介護5になっても、自分は健康であると思えることができる支援が必要であると考えます。

協会が実施する老人保健健康推進等事業（以下研究事業）において、「生活行為向上マネジメント」というツールを開発した。これは、対象者本位の医療、生活重視の医療、医学モデルから社会モデルへの転換を可能にするための具体的な評価・支援計画・支援方法を明らかにしたものである。また、人の生活を構成する作業に焦点を当てたマネジメントという新たな視点で、高齢者支援のあり方を提案している。

研究事業は、医療班（急性期病院での活用）、入所班（老健入所者での活用）、通所班（通所リハビリテーションでの活用）、訪問介護班（訪問介護との連携での活用）、実態調査班（地域で起業している作業療法士の調査）、普及啓発班（作業療法士・他職種への普及啓発）からなり、様々な領域において活用効果を検証している。連続性を持って生活を支援するためには、多職種連携が必須である。このツールを活用することで、対象者本人を中心にご家族や関連職種などと情報を共有し、対象者が医療制度から介護保険制度へ、病院から在宅へ、施設から在宅へ、よりよい地域生活へ、そしてよりよい人生を送ることの支援につながると考える。

人の作業に焦点を当てたこのツールの特徴と、3年間の研究事業で得られた知見ならびに今後の課題について述べる。

**【参考資料】**

- 1) “作業”の捉え方と評価・支援技術 生活行為の自律に向けたマネジメント。医歯薬出版
- 2) 平成22年度老人保健健康増進等事業 「包括マネジメントを活用した総合サービスモデルのあり方研究事業」報告書
- 3) 平成21年度老人保健健康増進等事業 「自立支援に向けた包括マネジメントによる総合的なサービスモデルの調査研究」報告書
- 4) 平成20年度老人保健健康増進等事業 「高齢者の持てる能力を引き出す地域包括支援のあり方研究」報告書